

24では〔拡〕散光に統一されている。このように5年間にかなり統一調整が進んでいる。できればA24が出版されると今後の討論の参考になるであろう。

48・6 「当用漢字音訓表」「送り仮名のつけ方」「ローマ字の使い方」等が改正された。例えばばぶぎ→吹雪、huirumu→fuirumu 等

48・9 「学術用語審査基準」が改正された。

48・12 「学術用語編集要項」が改正された。当委員会では最終決定版を作って文部省に提出した。MT5の1952語を100%とすると、削ったものは376(18%)、改めたもの、157(8%)、新語338(17%)、略語121、雲の名称55、計2097(107%)である。

49・1 文部省より「ローマ字による学術用語の書き表し方」が出された。例えば Kot'ingu 等の t'i が新しいし、i'inkai は今度は iinkai となった。「送り仮名のつけ方」も出された。これによると「うめたて」は法令用語では「埋立て」であるが、学術用語では「埋立」となっている。

49・7 文部省機構改革(法律第82号)により学術用語集の担当部局が学術国際局情報図書館課となった。この時点で見ると学術用語集は既に20編が発行済みで、数学編、物理学篇は22版、植物学篇は18版を数えており、気象学篇の初版は決して早いとは云えないことが判る。

49・9 気象学会常任理事会で10月31日までに更に常任理事、気象庁部長、各大学の意見を求た上で出版に踏み切ること。それ以後の意見は用語委が絶えず集めて「天気」等で紙上討論を行い、適当な時期に改訂を行うべきことが決められた。

50・8 50年に入って文部省の青戸、担当官と大井、小沢、山田の5人で毎月集って最終的なまとめに入り、産業図書KKとの出版契約を交し、組版に移り、校正を行うことになった。

50・10 吾々としては作業に入ってから一年の子定が3年かゝって辛うじて任務を終えることができた。既にMT5が7年前に多くの会員の努力で出来ていたことが幸いであったが、同時にこれは吾々に大きな制約となり、全面的に改正することができなかった。今回の追加は全く委員、専門委員、会員の努力の賜であって、こゝに各位に感謝を申し上げる次第である。又多忙な業務の傍ら、用語の選択から校正、記録にまで縁の下の努力を惜しまれず作業を推進された小沢正幹事と山田文雄君の功も忘れてはならない。吾々が作業している3年間にも、用語自体、仮名遣い、送り仮名、ローマ字等の規則が次々と変わって行った。従って出版は一日と雖も遅らすことはできなかった。今後は「天気」等に用語についての御意見をどんどん出して頂いて、適当に時期を限って改訂して行くべきことは、一般の辞書と何等異なるところがない。

本用語集の特色として特記したいことは次の2点である。「巻雲か絹雲か」は長い間論争されて来たが、「絹雲が出たのは当用漢字の音訓の制限からであって、この点が弛められた今日では、観測関係者の意見も参考にして巻((絹))雲とした。「形か型か」も調整用語集で論争されて来たが、今回は他部門と調整上の観点から最も妥当な用法に従ったもので、必ずしも現行と一致しては居ない。(1950, 10, 1・文責 大井)

気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
レーダー気象月例会	昭和50年12月11日	気 象 学 会	気象庁内
大気電気研究会	〃 12月15日～17日		埼玉大学理工学部
航空気象月例会	昭和51年2月下旬	気 象 学 会	東京国際空港ビル